

チャレンジアカデミー

フィールドワーク

グループワーク

プロジェクトはグループワークからスタート。SDGsや地域が抱える課題について学び、取り組むテーマを決定します。岡山市チームの課題は「岡山市の多文化共生を推進するための方策」を考えること。「共生」をキーワードに、互いに理解し尊重し合えるまちづくりをめざす方法について、岡山学芸館高等学校の生徒3人と甲南大生5人がチームを組み、アイデアを出し合いました。

続いてメンバーたちは現状を知るために、フィールドワークへ。岡山市では外国人人口が増加傾向にあり、特に東南アジアからの労働者が増えているという現状を知り、メンバーたちは外国人をサポートする岡山市職員に話を聞きました。現場では、多言語に配慮しながらも、会話に苦労する様子や、日本語の難しさについて帰国する外国人がいることを知る中で、単に日本語習得だけでは真の課題解決にならないと気づき、「ミニケース」を画面上にも焦点を当てた語学ゲームを考案しました。

昨年9月開催の「SDGsチャレンジアカデミー」では、自治体へ向けて解決策を発表しました。日本で暮らす外国人の日本語のスキルアップを目的とした「Language Exchange Game」と名づけられたゲームは、それぞれの母語を軸に、できるだけ自然な形で日本語を使った会話をを楽しむユニークなスタイルです。ゲームは多国籍の参加者が2グループに分かれ、多言語でヒントが書かれたカードが各グループに配布されます。その言語が理解できるメンバーが日本語でヒントの内容を説明し、これらを繰り返し返してグループごとにキーワード(答え)を探っていくというものです。考案したゲームは日本語教室で活用してもらったことになりました。



大学生と高校生が地域の課題解決にチャレンジ!

SDGs×甲南大学

身近な課題解決に地域の高校生と甲南大生がチームで取り組む「関西湾岸SDGsチャレンジ(主催/甲南大学・朝日新聞社メディアビジネス局)」。

2年目を迎えた2019年は、7月から9月にかけて神戸市、堺市、和歌山市、徳島市、岡山市を舞台に、5つのチームがそれぞれの地域がもつ課題に向き合いました。今回は初参加となった岡山市のチームをピックアップ。さまざまな文化が共生し、住み続けられるまちづくりをテーマにした岡山市チームの取り組みとその後について、サポート役を担った経済学部石川路子教授と2名の学生の声をを通して紹介します。



Teacher's Voice

経済学部
いしかわ のりこ
教授 石川 路子



共生の意味を一人ひとりが
考えられる取り組みになりました

岡山市チームが向き合ったのは、「外国人住民が増える中、多文化共生を実現する」という課題です。岡山学芸館高等学校で多文化をテーマに学習している生徒たちと甲南大生がチームを結成しました。

このプロジェクトのポイントは2つあったと感じています。一つは甲南大生と高校生が、一緒に考えること。高校生は自分たちが暮らす地域のことをよく知っています。一方、甲南大生は大学の教育の中で高校生より高度な専門的知識を得ています。それぞれが感じていることや気づき、また知識、知見を融合することで、課題解決のアイデアがどんどん広がると期待しました。

もう一つは、そもそも「SDGsって何だろう」を考えること。社会課題の解決策を考える時、「行政(社会)がすべきこと」に着目するあまり「自分事」の視点が抜けてしま

まいがちです。それは決して間違っているわけではありませんが、そもそもSDGsとは行政だけではなく、さまざまな課題を、私たち市民の一人ひとりが考え達成するための目標です。その精神に立ち返り、行政の目が届かない身近な周囲に目を配り、私たちにできることを考えようと、チームにはアドバイスをしました。

岡山市チームが意欲的に地域の声に耳を傾け、自分たちにできることを試行錯誤し考案した「Language Exchange Game」は、外国人同士、また日本人も含め、互いにことを学び合うもの。ゲームだから自然と楽しいコミュニケーションを生み、お互いの文化までも理解し合う、母国を離れ孤独に暮らす方々と地域をつなぐ大きなきっかけになりました。また、外国人住民との共生を模索する地域のどこでも、すぐに始められるすばらしい提案になったと思います。

持続可能な開発目標 SDGsとは

「Sustainable Development Goals」の略称。2015年の国連サミットで採択され、「誰一人取り残さない」持続可能で多様性と包摂性のある社会実現のため、2016年から2030年までを期限とする国際目標です。「質の高い教育をみんなに」「住み続けられるまちづくりを」など17のゴールと169のターゲットで構成されています。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS





僕たちのアイデア一つで
しあわせな社会づくりが実現できる

グループワークでは「理想のまちってどんなまち？」をテーマに、徹底的に意見を出し合いました。そして、理想のまちと実際のギャップに着目していく中で、「個を尊重し合う」「重要性が見えてきました。国籍や文化、宗教などの属性を取り払った、個々が尊重し合う」ということです。それを可能にするには、それぞれの違いを意

個々がわかり合える理想のまち



授業で住民自治や企業が持続的に発展していくための環境経営を学んだことがあり、SDGsの存在は知っていたし関心がありました。また、岡山出身で高校生のころ暮らしていた地域でも、多くの外国人がいて、彼らは外国人だけで行動しているところをよく目にしていました。



SDGsは経営学のテーマでもある

同様にフィールドワークを進めるうちに、みんなが「多文化」ということばに違和感を覚えるようになりまし



た。国籍や文化が異なることで、当然のように線を引いてしまつて、無理やり線をなくそうと。そもそも、同じ孤立したりしているんだと思いました。



地域の声から、課題の根っこに気づく

私たちが普段生活をする空間に外国の方々がいることは、特別なことではなく、多文化共生は身近で向き合うべきテーマだと感じていました。また、石川先生にアドバイスをいただいたように、高校生と大学生の10、20代の視点で課題を見据え、私たちにできることが大切であることに留意しました。

自分事ととらえることからスタート、
SDGsは身近な生活課題と気づきました



一人の人間だから多文化共生ではなくシンプルに「共生」ととらえ、みんなが共生できるまちづくりを考えるようになり、プロジェクトの目標が深まりました。それから「日常生活で誰かができることがいいね」や「やっぱり、楽しくないと持続しないよね」など、意見が一層活発に振返れば共生すること、自分たちが抱える身近な課題ととらえるターニングポイントだったと感じています。

また、そのように考えるようになったのは、当事者である地域の方々のリアルな声が聞けたから、考えるだけでなく行動することの大切さを学びました。

SDGsは特別じゃなく、日常生活の目標

企業や大きな組織でしかできないと思っていたSDGsですが、プロジェクトに参加して個人でもできることはたくさんあることが学べました。また、大学で学んだ福祉政策についての知識が役立ったことや、リーダーとしてみんなの意見をファシリテーションする経験を得たこと、先入観にとられない高校生のユニークな発想に触発されたことなど、多くの収穫を得た経験でした。卒業後も社会人として、みんながしあわせに共生できる社会づくりのために、私ができることに取り組みます。

識したうえで認めること。相手をよく知るためには、やはりコミュニケーションが肝心で、それを楽しめる点でゲームというアイデアは良かったと感じています。

工夫一つで、人をしあわせに

僕は立ち会えなかったのですが、中国とベトナム出身の方を交えチームの高校生たちが、実際に考えたゲームを試したときは、みんなが打ち解けて盛りあがったと聞いています。そして、ゲーム中、高校生の「日本に来て何が楽しかったですか？」という質問に、参加した中国の方が「今がいちばん楽しい」と答えられたエピソードに、僕たちのチームを誇りに思いました。

ほんの小さなことでも、工夫をすればお金をかけなくても人をしあわせにすることはできるし、共生する仲間としてウイン・ウインの関係が築けると実践を通して学べました。

現在、ゼミで経営組織論を学んでいます。組織の雰囲気づくりや人間関係を良くすることで、経営パフォーマンスを高めることがテーマです。今回、外国人住民の方の思いに寄り添おうと努力した経験は、専攻する学びをさらに深化することに、きっと役立つと考えています。

昨年12月、岡山市立西大寺公民館で岡山学芸館高等学校二年生の生徒12名が中心となり、日本語教室に通うベトナムと中国出身の生徒2名とともに考案したゲームを行いました。最初こそ戸惑いと不安の表情を見せていた生徒も、同校の留学生が母語を交えサポートに付いたおかげで徐々に緊張がほぐれ、テーブルには笑い声が提案だけにとどまらず、活動の輪が地域に広がっています。



岡山市の
担当者から
コメントが
届きました

岡山市市民協働局
市民協働部ESD推進課
課長補佐
いわた ひろひさ
岩田 裕久さん



岡山市では2005年からESD(持続可能な開発のための教育)に取り組んでおり、今回のプロジェクトはまさに人材の育成をめざすESDの取り組みだと感じました。

参加した学生たちは、多文化共生というテーマに沿って、地域課題をSDGsの視点から自分たちで掘り起こすことができ、地域の拠点である公民館を活用した、実りあるフィールドワークが実践できたと思います。また、課題の解決策として考え出された語学ゲームも、実践につながる具体的な提案であり、実際に西大寺公民館で実施されました。今後、このような学びと実践を通じた、若者による持続可能な社会づくりの取り組みを期待しています。